

べきであらう。單に豊富な知識を以て言語資料が取扱はれてあるだけではなく、その取扱に當つて到底常人には及び難い推理力を以て、複雑な現象の間に聯關を求め、所縁を究明せられたことは實に博士獨特の長所として、他人の追隨を許さぬところと言ふべきである。

我が國東洋史學の開拓者としての白鳥博士を追想するにつけても忘れることの出来ないのは、博士が獨り講義に於て論述に於て後進を誘掖せられたのみならずこれが發達を企圖して學會や研究機關を設立せられた功績である。博士の東京帝國大學に奉職せられた始めの頃には、前に述べた如く一般に東洋學界はまだ幼稚な階梯に在つて、碌に研究機關も發表機關も整つてゐなかつたので、博士はまづ亞細亞學會を組織し、同志を糾合して斯學の發展に資する途を開かれ、ついで明治四十一年に至り、當時有力な團體であつた東洋協會に調査部を開かせて、亞細亞學會をこれに導入し、この部の事業の一として學術報告を發刊することになつたが、同四十四年一月から更にこれを改めて東洋學報を發行することゝなつた。この雑誌は今もなほ續刊せられて誌齡二十九に及び、初號以來今日に至るまでの間に、獨り我が國のみならず、世界の東洋史學の發達に寄與したところ莫大といはねばならぬ。この外にも明治四十一年に滿洲鐵道會社をして滿鮮歴史地理研究事業を起さしめて、今に續く研究報告を發行せしめることになり、更に大正十三年岩崎男爵家に於て東洋文庫が設立せられるに當つて、博士はその理事及び研究部長としてこれに關與せられ、殊に十四年官を辭せられて後は、研究に従事せらるゝ以外専念これが經營に力め、文庫の發展とその事業の上に、顯著な功績を残されたのは周知のことである。かゝる機關の設立やその事業の經營に當つては、衝に當るもの以外、想像も及ばない深刻な苦心の隨伴するのが常であることを思ふとき、博士が僅に許される惜し